

文化の秋 ～灯台下も明るく灯す秋に～

校長 狩野博臣

黄金色に光る稲穂が秋風に揺れています。間もなくピンクや白、黄色の可憐なコスモスが私たちの眼を楽しませ、心を和ませてくれることでしょう。どんなに気候が変化しようとも、毎年、時を違わず咲く花たちに畏敬の念を抱きます。コスモスは英語で cosmos と綴り、この単語には「宇宙」という意味もあります。cosmos の語源は「秩序、調和、宇宙」を表すギリシャ語で、宇宙は秩序と調和がとれて成り立っているように、コスモスも花の形が美しく均整がとれていることからその名がついたようです。

さて、秋は芸術など文化に触れる季節でもあります。本校では来る10月16日(火)の午後、上智大学 総合人間科学部 社会学科の 藤村 正之 教授にお越しいただき「世界遺産から学ぶこと・考えることーその歴史・諸相と文化交流の展望」と題してご講演をいただくことになりました。その経緯について触れたいと思います。この7月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界の文化遺産としての価値が認められ、南島原市の原城跡もその構成資産の一つであることは大変喜ばしく、また誇らしくもあります。歴史をひも解いてみると、1549年に日本にキリスト教が伝来し、1580年にイエズス会の初等教育機関であるセミナリヨが有馬に設立され、当時の最先端の西洋教育や東西文化の交流が行われていました。その後、全国に禁教令発令(1614年)、島原・天草一揆勃発(1637年)・・・信徒発見(1865年)と、およそ300年にも及ぶキリスト教(徒)にまつわる壮大な歴史が構成資産には詰まっています。南島原市に所在する本校にとっても世界遺産登録は大きな出来事であり、何らかの形でその意味を生徒たちにも伝えたいと思い、今回の講演会を開催することとしました。では、なぜ上智大学の先生にご講演をお願いしたのか。上智大学はローマ・カトリック教会に所属する男子修道会の一つであるイエズス会を設立母体とし、1913年に設立されました。それは、1903年来日したあるドイツ人のイエズス会員が、日本のカトリック信者からカトリック大学を設立して欲しいという強い要望を受けたことに端を発しています。すなわち上智大学と南島原市はイエズス会によって結ばれた歴史的なご縁があるのです。そのような理由から、世界遺産登録記念講演と銘打って上智大学の先生にご講演会を依頼することとしました。

私たちは、遠く離れていたり、すぐに手に入らないものにはありがたみや価値を感じやすいですが、近くにあるものには興味や関心を持たず、その価値にも気づかないことが多いように思います。この講演会をきっかけとし、生徒たちには地元の財産に改めて眼を向け、グローバルに生きることを考えて欲しいという願いがあります。

是非、講演会には多くの皆様方にもお越しいただきたいと願っています。ご参加を希望される場合は、本校の保護者の皆様は、お子様を通じてご案内しました申込書をご提出ください。また、地域の皆様方には本校で整理券を配布したいと存じますので、詳しくは本校のホームページをご覧ください。